第１章　由良川の概要

第１節　流域及び河川の概要

由良川は、その源を京都・滋賀・福井の府県境三国岳に発し、北桑田の山間部を流れ、高屋川、上林川などを合わせ綾部を貫流し、さらに福知山に出て土師川を合わせ、北流して舞鶴市及び宮津市において日本海に注ぐ、幹川流路延長146km、流域面積1,880km²の一級河川です。

その流域は、京都府・兵庫県にまたがり、関係市町は５市11町に及んでいます。流域内の土地利用は、山地が大半であり、その比率は山地が約9割、平地約1割です。

平成７年度の流域内人口は約30万人です。その高齢化率については、京都府、兵庫県全体ではともに約14%であるのに対し、由良川流域では約22%と高くなっています。

図１－１　由良川流域概要図

由良川流域の年間降水量は、1,600mm～2,000mmと地域分布が見られますが、流域の西北に位置する舞鶴市から源流部の美山町にかけて年間降水量が多く、順次、南東方向へ沿って年間降水量は減少する傾向となっています。降水量の季節分布では、下流域で冬季の雨量が多く、中流域・上流域に移るにしたがって梅雨期と台風期の雨量が徐々に卓越する傾向を示しています。

流域の地形は、上流域では勾配が急で渓谷や河岸段丘が発達し、福知山盆地を流れる中流域は、川幅が広がり勾配もやや緩くなり瀬・淵が見られます。山裾の間を流れる下流域は、勾配がさらに緩く穏やかな流れを形成しています。

由良川流域の地質は、ハンレイ岩や塩基性海底火山岩類などの塩基性岩を主体とする夜久野複合岩類、砂岩・頁岩・粘板岩より成る舞鶴層群、ならびに頁岩・粘板岩・チャート・砂岩および塩基性海底火山岩類から成る丹波層群、夜久野層群を主体としており、これを白亜紀の矢田川層群が覆っており、さらにこれらの基盤岩類の上に、新生代第四紀の未固結堆積物の段丘堆積物および沖積層が被覆しています。

由良川流域は、丹波高地の一部を成し、中流域に位置する福知山盆地を境に、上流域の山地部と、下流域の山地部に分かれます。

流域の形状は、東西に長く、南北に短い菱形に近い形状です。

上流域のうち和知町安栖里周辺には、四段から成る河岸段丘が長く続いており、福知山盆地部には、長田野・以久田野・味方平などの洪積台地や河岸段丘、扇状地など種々の地形が発達しています。また、下流域では、狭隘な平地を形成しており、その西岸には大江山（833m）が突出しています。

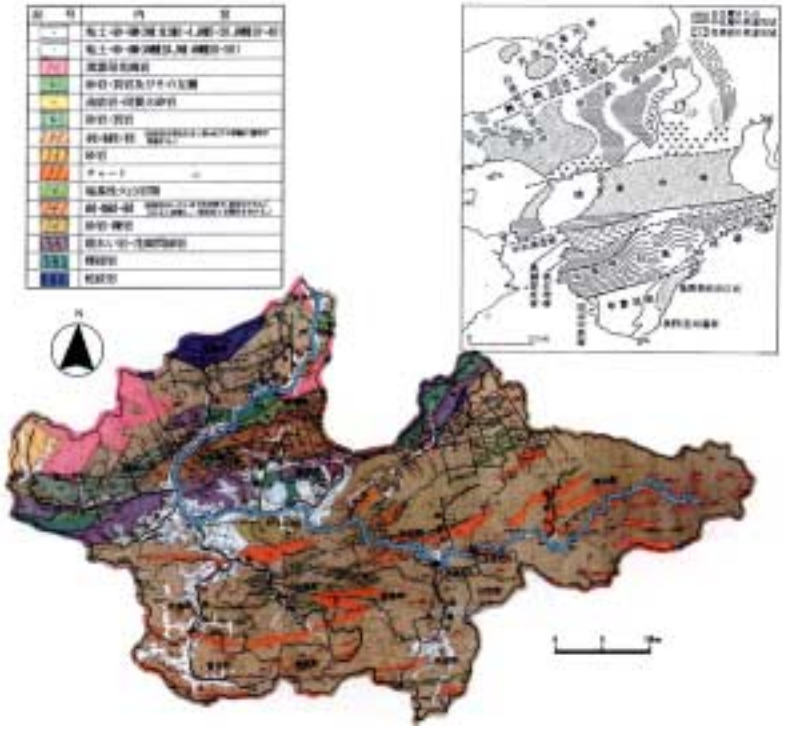

図１－２

由良川流域地質図（出典；近畿地方土木地質図 昭和56年近畿地方土木地質図編纂委員会刊）

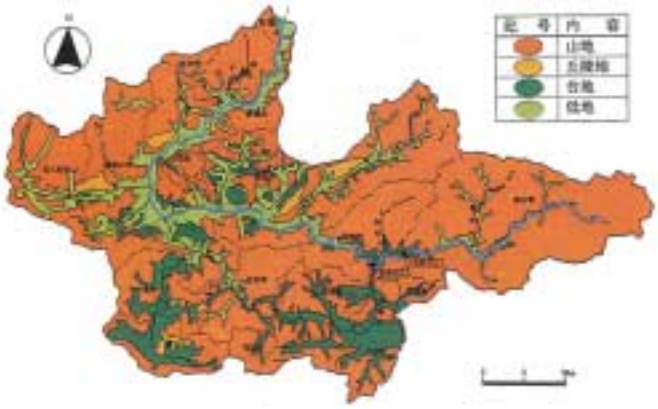

図１－３　地形区分図（出典；京都府・兵庫県土地分類図より作成）

由良川は昔、福知山付近から竹田川を経て瀬戸内海に流れていました。その後、地殻変動により兵庫県の石生付近に日本で一番低い分水界が形成され現在のように日本海へ流れるようになりました。このため、中流部の福知山盆地は標高が低く、そこから河口までの下流部では勾配は緩やかで、かつ狭長な谷底平野となっています。その地形的特徴から、河口部から牧川合流部までを「下流部」とし、綾部市味方、野田町付近までを「中流部」、さらにその上流域を「上流部」に区分しています。

由良川中・下流部の平地は福知山市～綾部市間では、広がりを見せていますが、福知山市と大江町の境付近から狭い平地が由良川に沿ってみられます。

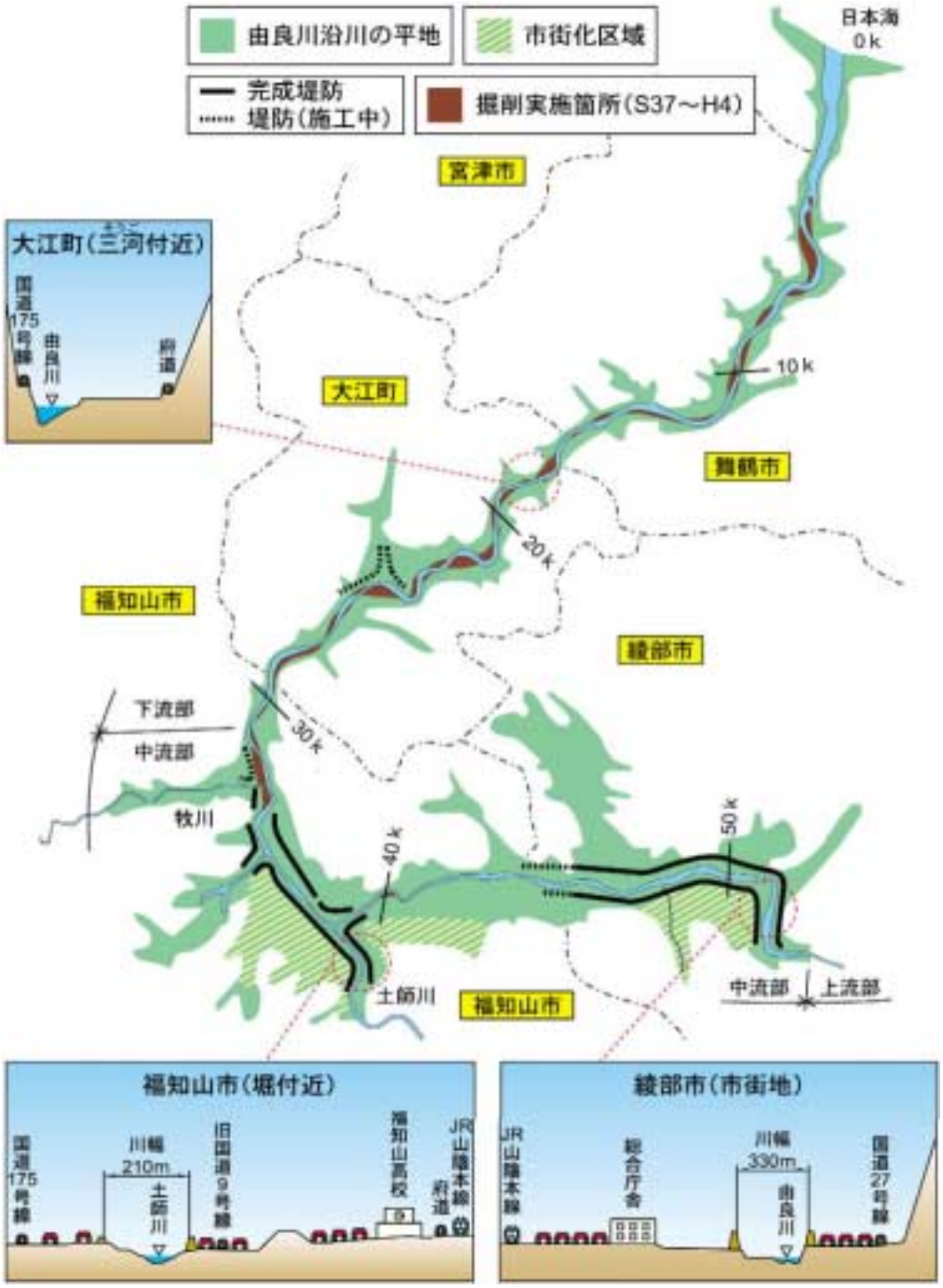

図１－４　　由良川中・下流部の平地

由良川中・下流域には、河岸に自然堤防が発達し、この付近の一部の遺跡では縄文・弥生時代から明治時代に至る複合遺跡が発見されており、何千年という長い年月にわたって生活されてきたことが明らかになっています。

さらに由良川には、「山椒太夫」や「大江山の鬼退治」などに代表される多くの民話・伝説が今に伝えられています。

このような丹波・丹後地方は、鉄道の開通によって飛躍的に発達しました。明治32年に京都-園部間が開通し、同時期に尼崎-福知山間が開通、さらに舞鶴軍港の開港に伴い、福知山-綾部-舞鶴間に官設の鉄道が開通するようになり大阪方面と結ばれたことで、京阪神地域と山陰地方、北陸地方を繋ぐ交通の要衝となりました。

このように由良川流域は、近畿北部圏における社会、経済、文化の基盤を成すとともに、都市近郊における貴重な自然空間を有しています。

流域内の産業は、年々第1次産業の比率が低下してきていますが、兼業農家も含めた農林業就業者の比率は高く、農林業は依然として地域の基幹産業となっています。また、市街地部では第3次産業の比率が高まっており、約60%の就業者比率を示しています。

福知山市では長田野工業団地（昭和49年分譲開始）の影響もあり、第2次産業の割合が高く、綾部市では、市域の面積が広く農山村地域を抱えているため、第1次産業の割合が高くなっていますが、綾部工業団地が平成8年4月に完成したことから第2次産業の伸びが期待されます。また、舞鶴市では、周辺拠点都市の性格から第3次産業の集積があり、製造品出荷額では、窯業・土石が中心となるほか、臨海型産業として木材・木製品加工業が立地しています。

河口部には日本海航路の由良湊があり、昭和初期まで舟運による物資輸送が行われていましたが、昭和初期以降の道路・鉄道交通の発達により舟運は衰退しました。

一方、由良川の自然堤防や河畔の低平地といった洪水の常習的な氾濫域は、農作物が流亡してしまう中で、水が引いた後に堆積した土砂泥土が最上の肥料となり、水害に強い桑が繁茂しやすく、桑畑として利用され養蚕業及び製糸業が栄え、この地方の経済的発展を担うとともに蚕・繭・絹を通じた流域文化を育む基盤となりました。

水産業は、アユ、コイ、フナ、ウナギなどを中心とする内水面漁業が主です。由良川の内水面漁業は安定しており、京都府下における1/4程度の漁獲高を占めています。

由良川の水利用は、古くからかんがい用水に利用されてきました。また、現在では生活様式の変革や産業の発展に伴って、かんがい用水の他に水道や工業、発電用水として利用されるようになりました。

由良川流域では、自然公園法に基づき、河口部の「若狭湾国定公園」、支川竹田川流域における「多紀連山（たきれんざん）県立自然公園」が指定されています。また、河口部から西へ連なる由良海岸は、白砂の遠浅で海水浴場として親しまれるとともに、そのコバルト色の日本海の眺望が、若狭湾国定公園の代表的な景観となっています。

由良海岸

上流部は、緑を基調としたスギ、ヒノキなどから構成される森林を映す渓流を呈しており、河川と周辺が一体となって美しい景観となっています。また、ダム貯水池においては静水面が周辺と調和した良好な水辺空間を形成しています。この区域ではこうした良好な景観のなかで河川敷が少ないものの美山町のアユ祭り、桜まつり、和知町のアユまつり、カヌー競争など渓流を生かしたレクリエーション利用が行われています。

中流部では、由良川水系の中でも唯一盆地の平坦部を流れ、川幅も広がり瀬・淵が発達して、ゆったりとした河川空間を形成しています。

背後には綾部・福知山の市街地と、紫水ヶ丘（しすいがおか）公園、福知山城や三段池公園等があり、この付近の河川空間は利用者も多く、高水敷にはスポーツ広場等も整備されています。

土師川合流点付近（福知山市）

下流部は、幅の狭い谷底平野となっており、山裾の間を流れる下流部は堤防も殆どなく、田園風景をかもしています。また、河口部は、大きな砂州を形成するなど広い水面空間を形成しています。

発達した砂州（平成6年8月）

なお、由良川の最大の特徴は、中流から下流にかけて、高水敷や河畔に樹木が連続して存在することです（以下「河畔林」という）。

この河畔林には、由良川沿川の自然植生であるエノキームクノキ林や、竹藪（マダケ）があり、緑豊かな景観を形成しています。

河畔林（福知山市）